

スクールカウンセラーへのイメージについての調査研究 —大学生・高校生への調査の比較から—

A Study on the Image of the School Counselor :

A Comparative Study of University Students' and High School Students' Views by Questionnaire

植田 佳世* 丹野 眞智俊**

Ueda Kayo

Tanno Machitoshi

本研究の目的は、スクールカウンセラーが学校生活の中で生徒にどのように受けとめられているかを、そのイメージを調査することで明らかにすることであった。同時に、教師、養護教諭へのイメージを調査してスクールカウンセラーへのイメージと違いがあるかどうかをSD法によって検証した。その結果、スクールカウンセラー、養護教諭のイメージが教師のイメージよりも「やさしい」「温かい」「信頼できる」というような肯定的なイメージがあることが判明した。一方、スクールカウンセラーの活動や親近性において、教師、養護教諭よりも低く、スクールカウンセラーが未だ生徒にとっては身近な存在ではないことが明らかになった。

キーワード：イメージ、スクールカウンセラー、教師、養護教諭、学校心理学

問題と目的

いじめ、不登校、学級崩壊など、学校教育現場は今、さまざまな問題を抱えている。これらの問題は教育だけの問題というよりは、社会の問題として捉えられ、それらにどう対処すればよいかが学校内外で議論されている。

文部省（現文部科学省）は、これらの学校現場の問題解決を図る方法として、平成7年から「スクールカウンセリング活用委託事業」を開始した。この事業は、学校現場における問題解決を図る一助として臨床心理士等の専門家を派遣するという形態をとり、平成7年度は154校が協力校となった。さらに平成8年度には初年度の約4倍の予算が計上され、3年目にあたる平成9年度は1000校規模にまで飛躍的に増加した（伊藤・中村，1998）。また、村山（2001）は「これは聖域視されてきた公教育の現場に教育改革の一環として外部の専門家である臨床心理士を投入し、教師と連携しながら児童生徒に役立つ援助をする画期的な事業である。」と述べている。村山（1998）は、研修会、学会発表、報告書などを参考にスクールカウンセラーが学校現場にどのようなメリットがあったかについて次のように述べている。「①児童生徒・保護者への直接的援助・不登校の子どもが登校するようになったなど。②コンサル

テーションの有効性—生徒・保護者へのかかわり方について教師の相談にのったこと。③専門家として優秀なスキル—箱庭療法、家族療法、動作法、自立訓練、危機介入、グループアプローチなど、派遣されたカウンセラーが得意のスキルを発揮して問題解決に貢献したり、教師を協同セラピストとして面接にあたりたりして役立った。④校内研修を通じて、カウンセリング、現職員へのコンサルテーション、フィールドワーカー、校内研修の講師、事例研究会のスーパーヴァイザーなどの多方面な役割を果たしていることがうかがえ現場の役に立った。」また、伊藤（2000）を中心に行なわれた活用調査研究委託事業に関する全国調査においても「概して好評」といった評価が学校現場から数字となってでてきている。このように、学校現場に初めて臨床心理の専門家が公的に導入されたことは、大いに評価され、平成13年度からはスクールカウンセラー配置事業として制度化されることになった。

一方、スクールカウンセラーに対する期待が高まるなか、これまで、学校現場において生徒相談を行ってきた教師や、生徒のメンタルヘルスに貢献してきた養護教諭からは、スクールカウンセラーとの連携のあり方などについての課題がだされるようになり、スクールカウンセラーに対するニーズや要望

* 本学大学院合同研究室

** 本学大学院教育学専攻教授

に関する研究も広く行なわれるようになった。

藤田(1997)は、養護教諭がスクールカウンセラー制度の導入に不安と戸惑いがあることを報告している。養護教諭とスクールカウンセラーは、子どもの精神衛生面では近似的な役割をもっているため、配置されたスクールカウンセラーが学校でどのようなカウンセリング活動を展開していくかによっても、両者の分担と連携の仕方が異なってくる。これまでの養護教諭の実践の形態に微妙な変化が生じていく可能性への不安があるということである。一方、養護教諭、スクールカウンセラーが担任教師とチームを組んで不登校生徒の理解を深め慎重に対応した事例(未廣, 1999)や、今後、保健室登校の増加に伴い、養護教諭とスクールカウンセラーの協働が必要とされる(伊藤, 2003)との報告もある。

伊藤・中村(1998)は、教師とスクールカウンセラーが学校という場で協働していくためには、まず両者がこれらの役割をどのように認知し、どのような役割分担あるいは協業を考えているのかについて明らかにする必要があると考え、教師とスクールカウンセラーを対象に学校現場へのスクールカウンセラー導入についての意識調査を行なった。その結果、教師とスクールカウンセラーを比較すると、互いの役割に対する期待度やスクールカウンセラーに求める条件についてかなり共通した見解を有してはいるが、両者の間には立場の違いを反映した多少のズレが見られると述べている。また、学校現場と心理臨床という異質なものが出会うという初めての試みであるため、それぞれの専門性が脅かされるのではないかという不安をお互いが抱いていることも示唆している。

また、学校現場に派遣されたスクールカウンセラー自身の活動報告によると、安好(2000)は、2年間の自らのスクールカウンセラーとしての実践の成果と課題を考察するために行なった生徒への調査報告のなかで、スクールカウンセラーが学校で専門家として、相談の仕事をすることは周知されていたが、利用しやすい専門家として生徒に周知されるには、生徒との接触が充分とはいえなかったことが判明し、学校のなかにいる専門家・スクールカウンセラーのあり方を検討していくことが課題であるという見解を提出している。赤澤(2001)は、スクールカウンセラーを務める学校での個人面談の少なさから、苦しみながらも相談を申し込む気になれないでいる生徒もいるのではないかと。摂食障害、リストカットな

どの問題行動は起こっているのに、その生徒たちは相談室には来ないという現状を報告している。

このように、生徒を援助する側の援助体制にも課題が多く見られるが、援助を受ける生徒側にとっても、スクールカウンセラーをどのように受けとめているかについては、まだまだ報告も少なく、明らかであるとはいえない(半田, 2003)。中島ら(1997)も、教育現場においてスクールカウンセラーの必要性が高く認識されていることを明らかにしたが、教育現場の中心はむしろ児童・生徒なのであり、それらを対象とした調査こそが現場を捉える最重要課題であると言えよう、と提言している。

そこで本研究では、スクールカウンセラーが学校生活のなかで、生徒にどのように受けとめられているかを、そのイメージを調査することで明らかにすることを目的とする。また同時に教師、養護教諭へのイメージの違いがあるのかどうかをSD法により検証する。

方 法

1. 調査対象

H県内の公立高校2校に所属している高校生、計150名(男子45名、女子105名)で実施した。

2. 調査内容

質問紙は、植田(2004)が女子大学生に実施したものと同一のものを使用した。この質問紙を作成するにあたっては、女子大学生105名を対象に「スクールカウンセラーと聞いてどのようなイメージを抱くか」という調査を行ない明らかになった89のイメージと岩下(1983)の「SD法によるイメージ測定」のなかにある形容詞対を参考にして、適当であると判断した15の形容詞対を用いた。「どちらでもない」を中心に、左右に「ややあてはまる」、「非常にあてはまる」の5段階の評定とした。分析の際には、各段階に1～5の数値を割り当てた。同じ項目で、スクールカウンセラー、教師、養護教諭のイメージを調査した。

結果と考察

1. スクールカウンセラー、教師、養護教諭別での比較

スクールカウンセラー、教師、養護教諭別に平均値をプロットしたものが(Figure 1)である。ス

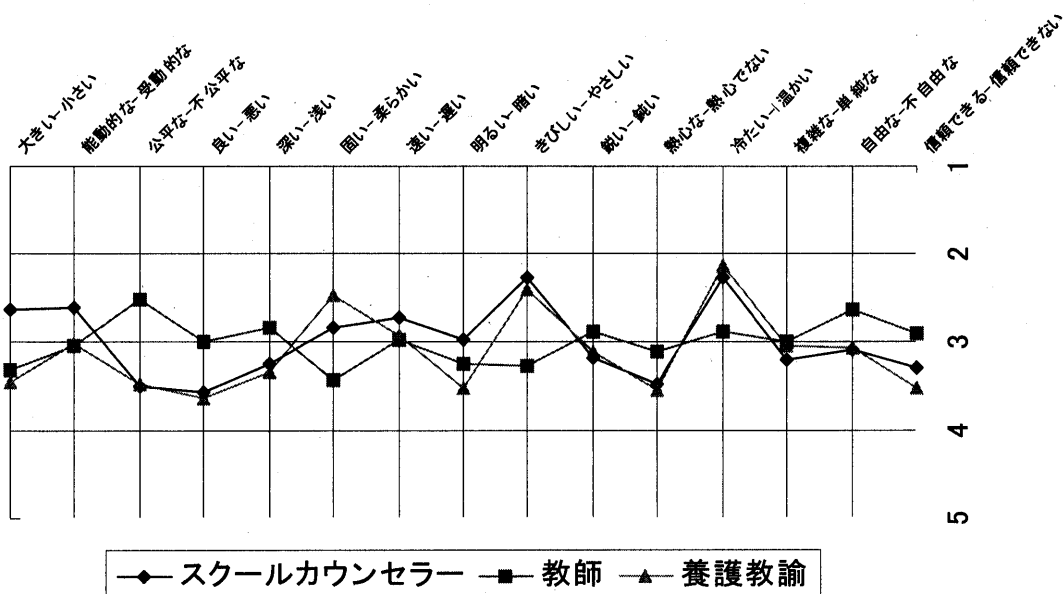


Figure 1 スクールカウンセラー, 教師, 養護教諭別の各項目の平均値

スクールカウンセラーと養護教諭のイメージが5つの項目を除いたほかは、ほとんど変わらなかった。その5つの項目とは「大きい-小さい」「能動的な-受動的な」「固い-柔らかい」「明るい-暗い」「信頼できる-信頼できない」である。養護教諭は、スクールカウンセラーに比べてやや「大きい」「能動的な」「柔らかい」「明るい」「信頼できる」などのイメージがあることがわかった。

植田 (2004) が女子大学生に行なった、スクールカウンセラーの役割に関する調査結果でも、高校時代にスクールカウンセラーに相談したことがあると答えた大学生は113名中2名で、ほとんどの学生がスクールカウンセラーと関わりをもっていなかった。その理由として「他の先生に相談していた」「周囲の目が気になって行かなかった」ということがあげられていた。また、「個人的にはスクールカウンセラーは嫌い」「スクールカウンセラーは身近な存在ではない」というような否定的な意見も見られた。これは國分 (1987) が指摘したように、「カウンセリング・イコール・心理療法」というイメージが学校や世間一般では強く、それゆえ、スクールカウンセラーの所に行くことは「心の病」を抱えて治療が必要だと思われるのではないかと思ひ、相談には行けないことを表わしているのではないか。また、問題を起こす生徒が自ら進んでスクールカウンセラーの所に行くことはほとんどない。大部分が養護教諭の所に相談に来る (足達, 1998) という報告にもあるように、スクールカウンセラーが相談する相手として、身近な存在ではないことを示していると考え

られる。今回の結果においても、養護教諭や教師のイメージと比べて、やや「受動的な」「暗い」というイメージが明らかになったことは、学校内でスクールカウンセラーの所に行くことは容易ではなく、まだまだスクールカウンセラーの役割が学校内において定着していないと考えられる。

教師のイメージについては、スクールカウンセラー、養護教諭に比べて「公平な-不公平な」「良い-悪い」「固い-柔らかい」「きびしい-やさしい」「冷たい-温かい」の5項目で差が見られた。教師には「不公平な」「悪い」「固い」「きびしい」「冷たい」という、どちらかといえば、やや否定的なイメージがスクールカウンセラーや養護教諭に比べて強いことがわかった。これに対してスクールカウンセラーや養護教諭に対して共通して見られるイメージは、「公平な」「良い」「熱心な」「やさしい」「温かい」といった肯定的なイメージであった。

これは、3者の役割の違いを表わしていると考えられる。生徒にとって教師は、評価を下す存在として捉えられ、それに対してスクールカウンセラー、養護教諭は、学校内で唯一評価を下さない存在、学習とは関係ない所で接してくれる存在と、教師よりも好意的なイメージを抱いていると推測できる。鶴養 (1995) は、その存在を「教科指導に携わらず、課題達成的な面で評価を担わない立場にあり、子どもたちの傷ついた部分、弱い部分に関わるという共通した特徴をもつ」と述べている。また、教師のイメージが全体に見て「どちらでもない」という傾向が強い結果となったのは、生徒がこれまで小学校か

ら高校まで、多くの教師とかかわってきたため、統一したイメージをもつことができなかったことや、あまりにも身近な存在であるために、かえてイメージしにくかったと考えられる。

2. 因子分析の結果

スクールカウンセラー、教師、養護教諭別に因子分析（主因子法、varimax回転）を行なった（Table 1～3）。固有値が1.00以上の基準によって因子数の決定を行なった結果、それぞれ3因子が抽出された。

スクールカウンセラーの第1因子は、「大きい—小さい」「能動的な—受動的な」「公平な—不公平な」「良い—悪い」等の形容詞対から構成されていた。これらを「一般的な評価性」因子と命名した。第2因子は、「速い—遅い」「きびしい—やさしい」「冷たい—温かい」等の形容詞対から構成されており、これを「親近性」因子と命名した。

第3因子は、「固い—柔らかい」「複雑な—単純な」の形容詞対から構成されていた。これを「活動性」因子と命名した。

Table 1 スクールカウンセラーの因子分析結果

変数名	因子1	因子2	因子3	共通性
大きい — 小さい	.542	.052	-.160	.323
能動的な— 受動的な	.555	.129	.024	.382
公平な — 不公平な	.551	-.241	.109	.373
良い — 悪い	.620	-.280	.095	.472
深い — 浅い	.738	-.107	.112	.568
明るい — 暗い	.503	.311	-.407	.516
鋭い — 鈍い	.592	.202	.031	.392
熱心な — 熱心でない	.684	.033	-.026	.469
自由な — 不自由な	.539	.101	.044	.302
信頼できる—信頼できない	.730	-.109	.146	.591
速い — 遅い	.406	.512	-.032	.428
きびしい— やさしい	-.070	.725	.089	.567
冷たい — 温かい	-.165	.872	.193	.825
固い — 柔らかい	.026	.243	.525	.335
複雑な — 単純な	.433	.172	.503	.472
寄与率 (%)	25.809	13.266	5.682	
累積寄与率 (%)	25.809	39.076	44.758	

Table 2 教師の因子分析結果

変数名	因子1	因子2	因子3	共通性
大きい — 小さい	.643	.054	.066	.421
能動的な— 受動的な	.522	.100	.241	.340
公平な — 不公平な	.529	.429	-.096	.474
良い — 悪い	.647	.332	-.075	.534
深い — 浅い	.665	.353	.048	.574
速い — 遅い	.397	.375	.357	.426
鋭い — 鈍い	.526	.459	.170	.517
熱心な — 熱心でない	.716	.308	.055	.611
複雑な — 単純な	.441	.032	.130	.212
信頼できる—信頼できない	.725	.323	-.102	.640
明るい — 暗い	.451	.534	.249	.551
自由な — 不自由な	.098	.590	.081	.365
固い — 柔らかい	.166	-.079	.650	.457
きびしい— やさしい	.241	.384	.638	.613
冷たい — 温かい	-.295	.128	.576	.435
寄与率 (%)	25.874	11.917	9.981	
累積寄与率 (%)	25.874	37.791	47.772	

植田（2004）が女子大学生を対象に行なったスクールカウンセラーへのイメージについての調査における因子分析の結果も、今回同様3因子を抽出した。その3因子とは、第1因子には、「公平な—不公平な」「良い—悪い」「能動的な—受動的な」「信頼できる—信頼できない」等の形容詞対から構成されており、「一般的な評価性」因子と命名した。第2因子には、「きびしい—やさしい」「冷たい—温かい」等の形容詞対から構成されたおり、「親近性」因子と命名した。第3因子は、「固い—柔らかい」「複雑な—単純な」等の形容詞対から構成されており、「活動性」因子と命名した。

半田（2003）は、中学生のもつスクールカウンセラーのイメージ調査において、「肯定的イメージ」と「静的イメージ」の2因子を抽出した。「肯定的イメージ」は「信頼できる—不信な」「親切な—いじわるな」等の形容詞対から構成されている。「静的イメージ」は「おとなしい—活発な」「しずか—そぞろしい」等の形容詞対から構成されており、中学生はプラスの雰囲気を感じるかどうか、静かな雰囲気かどうかという2つの視点でスクールカウンセラーを理解していると述べている。

中学生がプラスの雰囲気か静かな雰囲気かどうか

の2つの視点でスクールカウンセラーを理解していると考え、高校生および大学生は、スクールカウンセラーの活動に対する「評価」を強く意識しているのではないかと考えられる。話しやすい、静かで落ち着くという「癒し」の部分と「答え」を導いてくれる「相談能力」の部分でスクールカウンセラーを理解、評価していると思われる。岡堂(1998)は高等学校のスクールカウンセリングの事例において、「進路」というテーマを入り口にして来談者が飛躍的に増えたことを報告している。何となく話しやすい相手としてだけでなく、「進路」についてのしっかりとした答えを導いてくれる相手として、スクールカウンセラーは求められているといえるだろう。

教師、養護教諭についてもそれぞれ3因子を抽出した。それぞれ第1因子を「一般的な評価性」因子、第2因子を「親近性」因子、第3因子を「活動性」因子と命名した。さらに因子を構成する項目の得点の平均を算出し、「一般的な評価得点」「親近性得点」「活動性得点」と名付けた。これをスクールカウンセラー、教師、養護教諭別に表に示した (Figure, 2)。

ここで明らかになったことは、「一般的な評価性」と「親近性」において、養護教諭が最も高い値を示した。生徒は、学校現場において、養護教諭に最も親しみを感じていると考えられる。

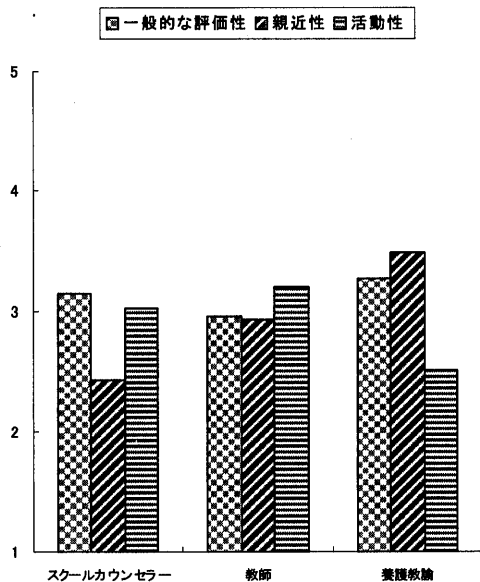


Figure 2 各因子のスクールカウンセラー、教師、養護教諭別得点

Table 3 養護教諭の因子分析結果

変数名	因子1	因子2	因子3	共通性
大きい - 小さい	.644	.508	.010	.674
能動的な - 受動的な	.487	.406	.073	.407
速い - 遅い	.704	.046	.325	.603
明るい - 暗い	.761	.287	-.071	.667
鋭い - 鈍い	.715	.207	.183	.587
熱心な - 熱心でない	.751	.472	-.064	.791
自由な - 不自由な	.487	.271	-.010	.310
信頼できる - 信頼できない	.665	.553	-.075	.754
公平な - 不公平な	.315	.784	-.130	.729
良い - 悪い	.591	.643	-.077	.768
深い - 浅い	.544	.584	.028	.638
固い - 柔らかい	.012	.008	.719	.517
きびしい - やさしい	-.007	.009	.785	.616
冷たい - 温かい	.024	-.286	.765	.667
複雑な - 単純な	.318	.375	.497	.490
寄与率 (%)	28.857	18.283	14.314	
累積寄与率 (%)	28.857	47.140	61.454	

林 (1997) は、保健室を心の問題をからだの不調として気兼ねなく来られるところと表現し、生徒たちが学校の中で唯一自由に出入りして、誰からも咎めを受けないところと述べている。このことから生徒にとって、養護教諭が最も親しみを感している存在だといえよう。「活動性」においては教師の得点が高かった。

また、スクールカウンセラーの「親近性」の得点が他に比べて低かったことは、スクールカウンセラーが、まだまだ身近な存在ではないことを示しているといえる

3. 大学生と高校生のスクールカウンセラーへのイメージの違い

スクールカウンセラーへのイメージについて、植田 (2004) が女子大学生に行なった調査との比較をするためにも検定を行なった (Table, 4)。「大きい-小さい」「良い-悪い」「深い-浅い」「きびしい-やさしい」「するどい-鈍い」「熱心な-熱心でない」「冷たい-温かい」「複雑な-単純な」「信頼できる-信頼できない」の9項目で有意差が見られた。大学生のスクールカウンセラーへのイメージが高校生に比べて、「大きい」「良い」「深い」「鋭い」

「熱心な」「信頼できる」という肯定的なイメージが高いことがわかった。

これは、世間一般で「心のケア」という言葉が盛んに使われ、学校現場においてもスクールカウンセラーが、不登校、いじめ、などの問題を解決する救世主のように報じられ、「スクールカウンセラーとはやさしく、話をきいてくれる存在である」といった先入観としての、良いスクールカウンセラーのイメージが大学生の調査結果に表れているのではないかと考えられる。一方高校生は、スクールカウンセラーに対しては好意的ではあるが、全面的にすばらしい存在と言えるほどのかわりか少ないのではないかと推測される。

総合考察と今後の課題

本研究では、高校生のもつスクールカウンセラーのイメージを、教師、養護教諭のイメージと比較す

ることで、学校現場において生徒がどのようにスクールカウンセラーを受けとめているのかを明らかにした。それは言い換えると、スクールカウンセラーが相談したい相手であると、生徒に認識されているかを検証することともいえる。しかし、スクールカウンセラーの活動スタイルはさまざまであり、中学校、高等学校によっても違い、その中で、それぞれ一校、一校の活動スタイルがある。今後の課題としては、スクールカウンセラーの活動スタイルが違う学校現場での調査が必要であると考えられる。また、いじめによる生徒の自殺が社会現象として報じられ、誰かに相談することができれば、自殺を防ぐことができるのではないかとということで、スクールカウンセラーへの期待が高まっている中、実際は、スクールカウンセラーが学校現場においてどのような働きをしているのか、生徒にどのように受けとめられているのかという報告は、まだまだ少ない。

石隈(1999)は、「学習面、心理・社会面、進路面において、さまざまなレベルの援助サービス(一

Table 4 高校生と大学生の各項目における平均値と標準偏差およびt 検定の結果

		高校生 N=150		大学生 N=98		
		平均値	(SD)	平均値	(SD)	有意
大きい	— 小さい	2.63	1.03	3.91	1.04	$p < .01$
能動的な	— 受動的な	2.61	0.98	2.81	1.02	
公平な	— 不公平な	3.51	0.84	3.64	0.89	
良い	— 悪い	3.57	0.89	4.26	0.96	$p < .01$
深い	— 浅い	3.24	1.09	3.82	0.97	$p < .01$
固い	— 柔らかい	2.84	0.98	3.07	1.14	
速い	— 遅い	2.73	0.78	2.79	0.64	
明るい	— 暗い	2.97	0.92	3.03	1.18	
きびしい	— やさしい	2.28	0.93	2.01	0.97	$p < .05$
鋭い	— 鈍い	3.18	0.88	3.42	0.82	$p < .05$
熱心な	— 熱心でない	3.48	0.95	4.14	0.79	$p < .01$
冷たい	— 温かい	2.28	0.88	1.86	0.79	$p < .01$
複雑な	— 単純な	3.21	0.86	3.76	0.86	$p < .01$
自由な	— 不自由な	3.10	0.80	3.27	0.97	
信頼できる	— 信頼できない	3.28	1.01	3.79	0.83	$p < .01$

次的援助サービス、二次的援助サービス、三次的援助サービスを、教師や保護者とチームで行なえる専門的ヘルパー」としてのスクールカウンセラーの必要性を明らかにし、学校心理学に基づくスクールカウンセラーの有用性を示した。また原田(1997)は、生徒の抱える問題が、ひとりのカウンセラーだけの努力で解決できるほど単純なものではないため、スクールカウンセラーと教師、養護教諭との連携で活動する「コーディネーター型」教育相談を提案している。一方、半田(1996, 2000)は、休み時間等に生徒が相談室を自由に訪れ自由に過ごす活動を「自由来室活動」と名付け、そこでのスクールカウンセラーのかかわりが、援助的な効果をもっていることを明らかにした。

今回の調査結果においても、スクールカウンセラーが生徒にとって、まだまだ身近な存在ではないことが明らかになったことで、スクールカウンセラー自身が学校風土や生徒のニーズを理解し、それぞれのカウンセラー独自の個性が発揮できるような工夫を行なっていくことが、今後の最重要課題ではないかと思われる。

【引用文献】

赤澤恵子 2001 校内相談室のあり方を探る—S校カウンセリング活動の実践報告から—(事例研究報告)
 足達禮子 1998 養護教諭の立場から 氏原 寛・村山正治編 今なぜスクールカウンセラーなのかミネルヴァ書房 Pp.126-129.
 藤田和也 1997 養護教諭と学校カウンセリング 教育 47 No.2 69-79.
 半田一郎 1996 公立中学校での学校カウンセラーとしての体験 こころの健康 11 18-23.
 半田一郎 2000 学校における開かれたグループによる援助—自由来室活動による子どもへの直接的援助—カウンセリング研究 33 265-275.
 原田正文, 府川満晴, 林秀子 1997 スクールカウンセリング再考—コーディネーター型教育相談の実践—

朱鷺書房 Pp.32-33
 石隈利紀 1999 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—誠信書房 P.185
 伊藤美奈子, 中村 健 1998 学校現場へのスクールカウンセラー導入についての意識調査—中学校教師とカウンセラーを対象に— 教育心理学研究46 121-130.
 伊藤美奈子 2000 学校側から見た学校臨床心理士(スクールカウンセラー)活動の評価—全国アンケート調査の結果報告— 臨床心理士報 20 21-42.
 伊藤美奈子 2003 保健室登校の実態把握ならびに養護教諭の悩みと意識—スクールカウンセラーとの協働に注目して— 教育心理学研究 51 251-260.
 岩下豊彦 1983 SD法によるイメージの測定—その理論と実施の手引き— 川島書店
 國分康孝 1987 学校カウンセリングの基本問題 誠信書房 Pp.24-25.
 村山正治 1998 臨床心理士によるスクールカウンセリング 氏原 寛・村山正治編 今なぜスクールカウンセラーなのか ミネルヴァ書房 Pp.17-18.
 村山正治 2001 新しいスクールカウンセラー制度の動向と課題 臨床心理学 1 No.2 137-141.
 中島義美, 原田克巳, 草野香苗, 太田宣子, 佐々木栄子, 金井篤子, 蔭山英順 1997 義務教育現場における教員の期待するスクールカウンセラー像心理臨床学研究 15 No.5 536-546.
 岡堂哲雄 1998 スクールカウンセリング 学校心理臨床の実際 Pp.194
 末廣晃二 1999 養護教諭とスクールカウンセリング 教育と医学 47 723-732.
 植田佳世 2004 学校現場に求められるスクールカウンセラー像—教員・学生への調査の比較から—神戸親和女子大学大学院修士論文
 鵜養啓子 1995 学校における教職員との連携 村山正治・山本和郎編 スクールカウンセラー—その理論と展望— ミネルヴァ書房 Pp.140-152.

謝 辞

日々お忙しい中、調査にご協力いただきました高等学校の先生方と生徒の皆様にご心よりお礼申し上げます。